

H. Toyokuni: Elementa Linguae Latinae Botanicae (4)

## 17. 新分類群記載時の特徴記述の書きかた

植物の新分類群, 特に新種や新しい種内分類群を記載する際のラテン語の記載文は, 非常に長く詳細なものもあれば, ほんの数行しかない短い場合もある。しかし, 一般的に従来の記載文を考えて見ると, 先ず, その新種 (または種内分類群) が, 既存の植物とどういう点で異なり, 区別できるかという数行の記相があり, それに続いて, 全般的記載文になる。近縁種 (または近縁種内分類群) との区別点を主体とする数行の記述は, 正式には diagnosis と呼ばれ, 全般的記載文の方は descriptio である。一般辞典類では, diagnosis も descriptio も共に, 記載とか記述とか訳している。しかし, diagnosis には, 医学での診断の意味があり, 生物学上でも, 近縁な分類群から当該分類群を区別する際に使用される簡潔な記相であるから, 私は, 植物学ラテン語においては diagnosis に対して「特徴記述」という訳語をつけることを提案したい。そして, descriptio に対しては, 従来通り記載とか記載文と訳すのがよいと考える。

本稿では, その特徴記述の書き方について話を進めて行く。

昔は, ヨーロッパの植物分類学関係の雑誌での新分類群記載の際には, 長文のラテン語による語義文が殆どで, 場合によっては検索表もラテン文のものが多かった。しかし, 近年ヨーロッパの国の人達でも, 若い世代ではラテン語がそれ程簡単では無くなったのか, 或いは英文の記載の方が, より多くの国の人達に読んでもらえると考えたせいか, 新分類群の発表に際して, 特徴記述だけをラテン語にし, 命名規約上の条件を満たし, 後は英文の記載をつける方式が増加しつつある。日本でも, かつて牧野富太郎先生がこの方式を採用しておられた。

普通, 新種を記載する際の特徴記述は, 最も近縁な種1種と比較して, その新種がどの部分がどのように異なる事によってその近縁種から識別できるかを簡潔に表現する。但し, 近縁種が複数あって, その近縁度に何れも甲乙がつけられぬ, 即ち唯1種にしばれない場合には, 2種または3種をひきあいに出して, それぞれの主要な区別点について記述する。

一方, 同じ属の既知種からは, 全く異なった重要な特徴で識別可能な新種の場合には, 他種をまったくひきあいに出さず, 当該新種の特徴のみを強調する特徴記述だけをつければよく, 実際に, そのような形式の特徴記述もよく見うけられる。

特徴記述 (diagnosis) を書く際のラテン語の構文は, できるだけ簡潔で誤解されないようにする必要がある。以下若干見本を書いてみる。

## (1) 例1

Aに近縁である, しかし ~ で異なる。

Affinis (Affine) + Aの学名の与格, sed ~ diversus (diversa, diversum)。

この例1の場合には, 動詞を全く使用しないで書けるので, 便利である。実際に, 例えば長野県の高山で, 未知のスノキ属の植物が発見され, それがクロマメノキに近縁で, 花が非常に大きく, 花冠が圧平壺形であるとして, 上のパターンに当てはめると次のようになる。

Affine *Vaccinio uliginoso*, sed floribus valde magnis et corollis depressourceolatis diversum.

上記の特徴記述で, 最初の affine と最後の diversum の2つの形容詞が中性の語尾を取っているのはこの文中にはないが, 主語となるべき新種の学名中の属名 *Vaccinium* が文法的に中性名詞だからである。

近縁な (affinis, affinis, affine) の代わりとして, 近い (propinquus, propinqua, propinquum) とか, 非常に近い (proximus, proxima, proximum) を使用しても構文は同じでよい。~で異なるという場合の~では, ラテン語では, 奪格 (casus ablativus) で表現する。従って, 「花が非常に大きく, 花冠が圧平壺形である」に相当するラテン語 "flores valde magni et corollae depressourceolatae" を奪格にして, "floribus valde magnis et corollis depressourceolatis" とすればよい。この場合の奪格は手段の奪格 (casus ablativus instrumenti) と称し, 英文の "by having ~" とか "in having ~" に相当するとお考え戴ければよいと思う。異なる (相異している) という形容詞 diversus は, 他の類似の意味を持つ形容詞, 例えば distinguen-

dus とか dignoscendus で置きかえてもよい。また前半と後半の文にそれぞれ英語の be 動詞に当たる esse を補うと、一層よい。この動詞 esse を入れ、若干の用語を置きかえ、文を書き直したものを次に示す。

Proximum *Vaccinio uliginoso* est, sed floribus valde magnis et corollis depressourceolatis est distinguendum.

次に、上述の例の後半部分を、形容詞を使用せず代わりに動詞を使用して書きかえることもできる。動詞としては、英語の differ に相当する、differ の語源であるラテン語の differo という動詞を 3 人称単数現在形にし differt として使用するとよい。この形で上文を書きかえると、

Proximum *Vaccinio uliginoso* est, sed floribus valde magnis et corollis depressourceolatis differt.

となる。

(2) 例 2

例 1 では、記載されるべき新種そのものの学名が潜在的な主語となっていて、特徴記述中には、特に主語を入れることをしなかった。今度は、主語を入れ、また後半に「～で A から容易に区別される」という構文を紹介する。

この種（本種）は A に非常に近縁である。しかし～で A から容易に区別される。

Haec species + A の学名の与格 + valde affinis est, sed a (ab) + A の学名の奪格 + ～ + facile + distinguitur.

この形式に(1)の場合同様実例を当てはめると、

Haec species *Vaccinio uliginoso* valde affinis est, sed a *Vaccinio uliginoso* floribus valde magnis et corollis depressourceolatis facile distinguitur.

「区別される」は, *distinguo*（英語 *distinguish* に相当）を 3 人称単数現在形の受動形 *distinguitur* とする。この例では、特徴記述の前半と後半の両方にクロマメノキの学名を載せたが、後半の文では、前置詞 a (ab) の後には代名詞を置くのがよい。代名詞も名詞や形容詞と同様に文法上の性・数・格により語尾変化（転尾）する。代名詞は人称代名詞を使用し、その文法上の性は、代名詞で受けるべき学名の属名の性に一致させる。人称代名詞の語尾変化は表 1 のとうりである（ここでは、記載に必要な 3 人称のみ取り上げた）。なお、クロマメノキの属名は中性であるから ab eo となる。

「～から」という場合に使用する前置詞は、普通

表 1. 人称代名詞の 3 人称

|        |    | m.         | f.         | n.         |
|--------|----|------------|------------|------------|
| 単<br>数 | 主格 | is         | ea         | id         |
|        | 属格 | ejus(eius) | ejus(eius) | ejus(eius) |
|        | 与格 | ei         | ei         | ei         |
|        | 对格 | eum        | eam        | id         |
|        | 奪格 | eo         | ea         | eo         |
| 複<br>数 | 主格 | ei(ii)     | eae        | ea         |
|        | 属格 | eorum      | earum      | eorum      |
|        | 与格 | eis(iis)   | eis(iis)   | eis(iis)   |
|        | 对格 | eos        | eas        | ea         |
|        | 奪格 | eis(iis)   | eis(iis)   | eis(iis)   |

a であり、これは英語の from とか out of の意味を持つ。この前置詞で支配される語が母音で始まる場合には ab を使用し、子音で始まる場合には、a でも ab でもよいが、一般的には、a が多く使用されている。

(3) 例 3

今度は、特徴記述の後半の文を関係代名詞を使って表現する例をあげる。

この種（本種）は A に非常に近縁である、そしてそれからは～により容易に区別される。

Haec species + A の学名の与格 + valde affinis est, a quo（比較する対象の学名の性により、この関係代名詞は変化する）+ ～ + facile distinguitur.

この形式にまた実例を当てはめると、

Haec species *Vaccinio uliginoso* valde affinis est, a quo floribus valde magnis et corollis depressourceolatis distinguitur.

である。この場合関係代名詞は、前置詞 a により支配されるので、すべて奪格である。従って、男性と中性は a quo、女性は a qua となり、複数では男・女・中性共 a quibus となる（表 2）。

表 2. 関係代名詞

|        |    | m.     | f.     | n.     |
|--------|----|--------|--------|--------|
| 單<br>數 | 主格 | qui    | quae   | quod   |
|        | 屬格 | cujus  | cujus  | cujus  |
|        | 與格 | cui    | cui    | cui    |
|        | 對格 | quem   | quam   | quod   |
|        | 奪格 | quo    | qua    | quo    |
| 複<br>數 | 主格 | qui    | quae   | quae   |
|        | 屬格 | quorum | quarum | quorum |
|        | 與格 | quibus | quibus | quibus |
|        | 對格 | quos   | quas   | quae   |
|        | 奪格 | quibus | quibus | quibus |

(続く)